

(1) 尾張津島天王社（おわりつしまてんのう
しゃ）って？



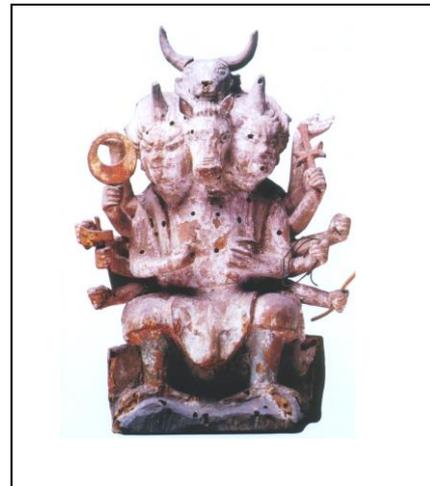
津島神社は、以前は**津島牛頭天王社**（つしまごずてんのうしゃ）あるいは津島天王社とよばれ、牛頭天王をまつていましたが、明治2年（1869）に「津島神社」と名前をあらためました。

津島牛頭天王社は、「疫病退散」（えきびょうたいさん＝風邪・インフルエンザ・ましんなどにかからない）のご利益で全国的な信仰を集めていました。



津島神社楼門（ろうもん）

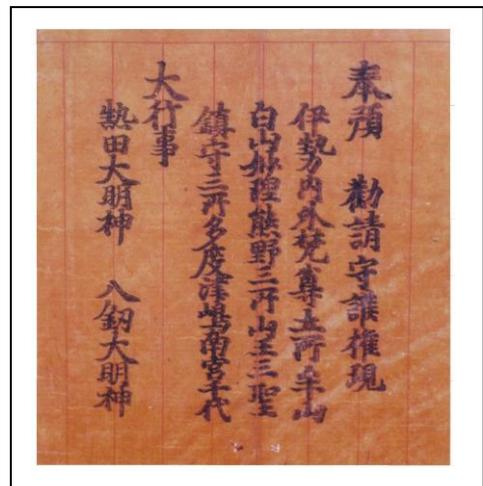
津島神社の社伝（言い伝え）によると「欽明天皇元年（540）牛頭天王が、津島に姿をあらわされ、弘仁元年（810）に正一位の神の位と日本総社の名前をいただいた」と伝えられています。神社名で「津島」と書かれている最も古い史料は『七寺一切経』（ななつでらいつさいきょう）です。七寺は様々な場所を移動し、現在は名古屋市中区大須にあります。このお寺に残っている『大般若経』（だいはんにゃきょう）の巻末に「津嶋」とあります。承安5年（1175）に書き写されました。



牛頭天王像（興禅寺）

この史料から当時の「津島社」は「伊勢内宮外宮・白山社・熊野（くまの）社・山王社・南宮大社・多度大社」とともに全国的に有数の大社となっていたことがわかります。このような大社となるには少なくとも承安5年より百年以上前には津島に牛頭天王がつくられていたことが考えられます。

津島牛頭天王社は牛頭天王をおまつりし、京都の祇園社（ぎおんしゃ＝八坂神社）と共に、全国に三千社の分霊社（ぶんれいしゃ）・末社をもつ大社となりました。



七ツ寺一切経奥書

(2) 尾張津島天王祭のはじまりは？いつ？だれが？



尾張津島天王祭が始まったのは、いつのことでしょう。

① 素戔嗚尊（すさのおのみこと）が始めた、欽明天皇元年(540)ごろ

「尊神が津島に來臨された時、民衆が夏の暑さに苦しむ姿を見られて、暑さを忘れさせようと祭をはじめられた」という説。真野時綱（まのときつな）が書いた『尾州津嶋天王祭記』（びしゅうつしまてんのうさいき）に記述。

② 後鳥羽上皇の時代に始まった

「後鳥羽院の御代に、『われは牛頭天王である。今、疫病が盛んで、民衆が苦しんでいる。祭をすれば、疫病はおさまる』と神のお告げがあり、草刈船の帆柱に衣類をかけて、笛・太鼓を鳴らし祭礼を行ったところ疫病が治まった。その後、祭は恒例となった」『市江祭記』（いちえさいき）記述。

③ 南北朝時代に始まった

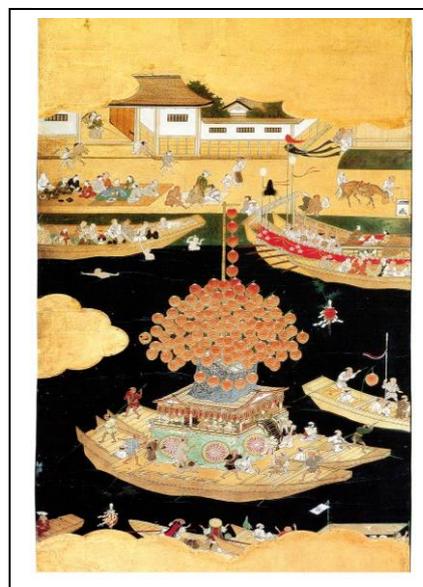
津島社が牛頭天王をまつっていたことを示す最古の史料は、現在の津島神社が保存している県指定文化財の鉄燈籠です。この燈籠の碑文から、延応2年（1240）・延慶2年（1309）・延文2年（1357）のいずれかです。年代とともに興味深いのは「六月十五日」の日付です。この日は尾張津島天王祭の行われる日であり、南北朝時代に尾張津島天王祭の原形となる祭が行われていたと考えられます。

④ 『浪合記（なみあいぎ）』の永享8年（1436）6月に始まった。

『浪合記』によると「津島の四家七名字が舟神事を行い、良王君（よしたかぎみ）の敵である台尻大隈守（黒宮）を6月14日に討ち取ったことを記念し、毎年行うようになった」という説。津島の11家とは、大橋・岡本・山川・恒川・堀田・平野・



神葎流し神事



巻藁舟



鉄燈籠

服部・真野・鈴木・河村・光賀の家です。

『大祭筏場車記録』（たいさいいかだばぐるまきろく）には大永2年（1522）の車楽舟（だんじりぶね）の置物人形などが記されていることから、当時すでに祭が行われていたことがわかります。

これらのことから尾張津島天王祭の始まった年代は15・16世紀と考えられていますので、500年以上の歴史があります。

祭が始められた頃には、朝祭と神葎流し神事は行われていましたが、当時は宵祭で飾る「提灯（ちょうちん）」がなく、江戸時代とは異なった宵祭であったと考えられます。「神葎流し神事」が最も古くから行われ、車楽舟による「朝祭」、次いで提灯をつけた巻藁舟（まきわらぶね）による宵祭が始められるようになりました。

(3) 尾張津島天王祭の2日間は？ どんな2日間？



2日間の流れは

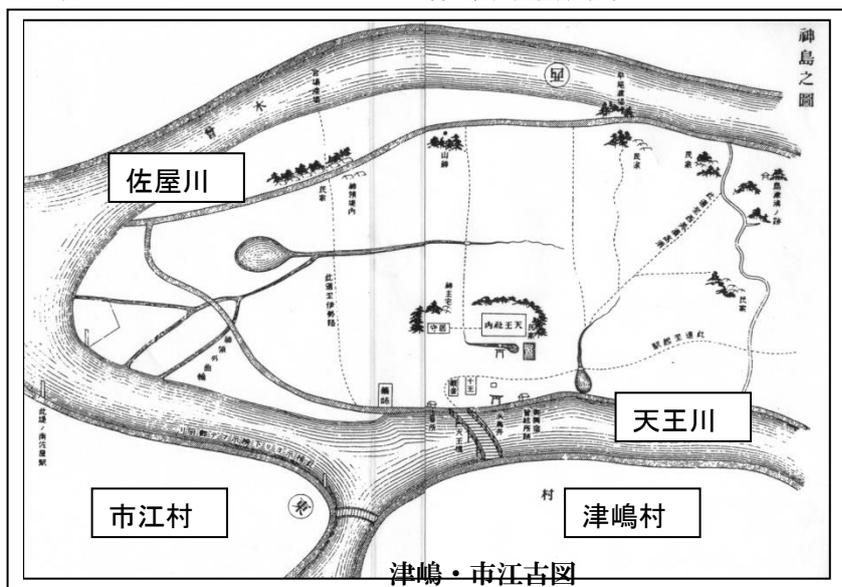
尾張津島天王祭は「津島のお天王さま」とも呼ばれた津島牛頭天王社の祭礼であり、**陰暦6月14日に宵祭、15日に朝祭**が行われていました。現在は**7月第4土曜日と翌日曜日**に行われて

います。京都の祇園祭はが陸上で行われます。一方、尾張津島天王祭は川が舞台で、水上に舟を浮かべて行います。それは、津島が鎌倉時代から伊勢と尾張を舟でつなぐ湊町だったからです。

尾張津島天王祭は、その主宰者という観点から大別すると、7月第4土曜日（陰暦6月14日）の夜に津島五ヶ村が行う「宵祭（試樂しがく）」、



津島祭礼図屏風



翌日（陰暦6月15日）の朝に市江（いちえ）と津島五ヶ村が行う「朝祭」、朝祭が終わった深夜（陰暦6月16日深夜）に津島神社が行う「神葎（みよし）流し神事」の3つの行事・神事から成っています。尾張津島天王祭の宵祭・朝祭は、氏子である町方衆（まちかたしゅう）が疫病退散（えきびょうたいさん）・病氣平癒（びょうきへいゆ）を願うお祭です。

神葎流し神事は、疫病をもたらす疫神・悪神を御葎（おみよし）に憑（つ）けて川に流し去る神事といえます。市江は津島から南に1里（4km）の場所にあります。

宵祭には、津島五ヶ村の米之座（こめのぞ）・堤下（とうげ）・筏場（いかだば）・今市場（いまいちば）・下構（しもがまえ）から数多くの提灯を飾った巻藁舟（まきわらぶね）5艘が出ます。市江は出船しないで、星宮（ほしのみや）で試楽（しがく）を行います。

朝祭には津島五ヶ村の車楽舟（だんじりぶね）5艘と市江から1艘、あわせて6艘が出ます。戦国時代以前から市江の車楽舟が津島の車楽舟5艘の先頭に立ちます。

尾張津島天王祭では舟を単に「車（くるま）」と呼び、祭のリーダーを「車屋（くるまや）」と呼びます。江戸時代、車屋は尾張津島天王祭の間は苗字帯刀（みょうじたいとう）が許されました。津島五ヶ村の今市場・筏場・下構・堤下・米之座の車家は庄屋・町年寄格の2家になりました。市江は、江戸時代から東保村（現愛西市東保町）の宇佐美家と荷之上村（現弥富市荷之上町）の服部家の2家が代々車屋をつとめています。

※ 現在の小学校区ごとの『車・舟』

米之座（こめのぞ）	北小校区
堤下（とうげ）	神守・神島田校区
筏場（いかだば）	西小校区
今市場（いまいちば）	東小校区
下構（しもがまえ）	南小校区

